

世代を越えて

二人のビートニクスの死

二日（一九九七年八月）、アメリカの小説家ウイリアム・パロウズがこの世を去った。彼は詩人のアレン・ギンズバークやジャック・ケルアックらと共に、新世代が旧世代に反旗を掲げた一九五〇年代のビート運動を先導した。

この連載のタイトル「オン・ザ・ロード」は、実はケルアックの小説名からいただいたものだ。国境を越えて世界中に広がったビートニクスたちの生き方は、閉塞感に押しつぶされそうな現代の若者に、世代を越えたメッセージを残しているように思える。個人の感受性や体験を大切にする生き方。一人ひとりのエネルギーは大きくなかったが、時代の動きとともに反戦・平和運動などにも結びついた。

ギンズバーク死去の知らせがとどいたのは四月だった。その日、私は久々に彼の詩集「吠える」を手にとった。表紙をめくると、彼の直筆サインがぎこちなく躍っていた。九一年年春、小さな書店のサイン会に現れた彼に「小粋なスーツ姿のあなたの姿なんて、想像もしていなかった」と言ってしまった。彼はただにや

りと笑っただけだったが、「人間は外観じゃないんだよ」と言いたげな表情が印象的だった。

いつの時代も、旧（ふる）い世代の人たちは、新しい世代に、社会の進むべき方向性を示せないままである。命の大切さを謳いながら戦争は続き、平等を説きながら差別は根深く進行する。個人の大切さをいいながら「マス」の効率を追求する。

「ビート世代」の若者は、そのような偽善性に抗い、自分の感性に正直な生き方を追求した。今の日本の若者も、豊かに見える社会を唾つばいと受け止め、表面上は繁栄した世界をありのままに受け入れることができないでいる。いつの時代も若者たちは、時代の性格を正確に、しかも厳しく嗅ぎ取っている。彼らは、親の世代が必死に努力して作り上げた世の中を欺瞞だと感じている。旧世代の者が努力して築き上げた世の中なんて、この程度か、と。

今では物わかりのよくなった前の世代の人たちも、かつては世の中の不条理に反発し、さまざまな形で激しい抗議の声を上げた。若者たちは、前の世代から時代を超えるメッセージを受け継ごうとしている。それだけに、「あのころのあんた

たちのエネルギーはどこへ行っただん」と、詰め寄りたいた気分なのだ。

純粋に生きようとするエネルギーにあふれた若者の中には、何とかして自分の生き方に突破口を見つけ出そうとする者も出てくる。親の心配をよそに、子供たちはしなやかに生き抜く知恵を身につけている。

そりゃ、大人たちにとつて、今まで努力して築き上げたものが否定されるのはいい気分がしない。心配は無用。親の世代が現在の息の詰まった社会に反発できないその分、「私たちがやってあげましよう」とばかりに、国家や民族、思想という既成の枠から飛び出していく。少なくとも、私はそんな若者たちを何人も知っている。

それに比べて、彼らをおおらかに見守れる大人はどれだけののだろうか。本当に心配なのは、余裕にない大人たちではないのか。

かつて若者の心を揺り動かしたビートニクスの死は、私にそんなことを思い起こさせた。

写真キャプション
・在米ハイチ難民の願い 米国・マサチューセッツ州で

